
命と私。

貂寡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命と私。

【著者名】

貂寧

N4862E

【あらすじ】

何十年も先のある自然現象が巻き起こす、恋と悲しみの話。

(前書き)

一部残酷な描写があります。

途方もない悲しみが込み上げてきた。

私にはその悲しみの原因が分からない。

ただ、ただ。悲しく、有りもしない涙が今にも瞳から流れ落ち地面に吸い込まれる感覚を味わった。

もともと、そんな感情なんて、私には無いものだと・・・
けれど、今の私を見た先生は驚き、そして喜ぶだろう。

なぜなら、私の頬を伝った水分は出ない筈の涙なのだから。

『先生。私、今泣いてます。この気持ち、何なんでしょうか。』

私は手に抱いていた男性の頭部をまじまじと見て、その後辺りを見回した。

窓ガラスの割れたビルが高々と建ち並び、地面は何なのか分からない瓦礫が埋め尽くしていた。

私は数時間前の記憶を巻き戻した。

7月27日、午前10時34分。

駅前のロータリー。

巳也と待ち合わせをしていた私は、暑い人工太陽の光の下、肌をジリジリ言わせていた。

「ごめん。待つた？」

巳也は遅刻をしてきた。

「4分53・09秒の遅刻です。」

巳也は私の頭を叩いて笑っていた。

「詳しく言いすぎ。秒まで普通数えるか？」

私は巳也の手を振り払い腕時計を見た。

「時間です。」

秒単位まで計らないと私は生きて行けない。

「もう10時40分か、菜流ななと話して居るとあつという間だな。」

巴也はそういうと予定どおりに来た市内に向かうバスに乗った。

「さあ、行こう。」

バスは音もなく出発した。

午前10時53分

市内のショッピングセンターの前に着く。

巴也は私の隣で鼻風船を膨らまし深い眠りについていた。

呼吸と共に膨らんだりしぶんたりした鼻風船は音もなく割れ、巴也是眠りから目覚めた。

「おはよー。つて、もう着いた？」

「はい。2分23秒前に着いています。」

「何で起こしてくれなかつた？」

「起こす必要が無いから。それにこじが終点ですから。」

巴也はバスの中を見回し、私の手を引いてバスから降りた。

午前10時57分

ショッピングセンターの入り口から中へ入る。

「えつと、ペットショップは3階だね。菜流さあ、行こう。」

私は手を引っ張られるままに巴也に着いて行く。

巴也是途中立ち止まつては、ショーウィンドーの中を見ては私を眺めたりしていた。

「どうしたんですか？」

私は首をひねつて巴也に疑問をぶつけた。

「ん? いやーえーと・・・何でも無い。」

巴也是自分の頭を少し触りながらこまかした。

短めにカットされたその髪は撫で付けられたように手に従つて動い

た。

「嘘付いても無駄ですから。けど話したく無かつたら良いんです。
話さなくて。」

「こんな事を言いつと巳也は、基本的には話をしてくれた。
「えつと、もうすぐ菜流の誕生日だ。だから、お祝いに何か買お
うと思つて・・・」

巳也は笑いながら頭を少し触つた。

私は照れ臭い時にする巳也の癖を眺めていた。

「さあ、行こ。」

巳也はまた手を引いて歩きだした。

11時13分

ペットショップに着く。

店内には、今流行つてゐるandroイドの生き物や意思を持つた脳
生物などが売られていた。

「これ、可愛いなー」

巳也は笑いながら手のひらに何かを乗せていた。

私はそれを覗いた。

「ネズミですか?」

「うん。可愛いだろ。」

「アンドロイド?」

「いや、生きているんだよ。」

「じゃあ意思を持つた脳生物?」

「それも違う。ただ食べ物を食べるだけのハツカネズミだよ。」

巳也の手のひらに乗つたハツカネズミは、
巳也に甘えるように顔を擦り付けていた。
私は背筋に何か冷たい物を感じていた。

「可愛いなー。」

私は巳也のその言葉を聞いてはつとした。
いつの間にか、私は手を振り上げて、

その巳也の手のひらの上にいる醜い物を呑き飛ばしていた。

「あ！」

巳也がそう言ったような気がした。

白くふわふわしたハツカネズミは中を舞いあつという間に重力に吸い寄せられ地面に叩きつけられた。

動かなくなつたハツカネズミを私はそつと手に乗せて巳也を見る。

「菜流、生き物はあつという間に死が訪れるんだ。

ハツカネズミは20日しか生きられないし、人間だって1000年も生きられない。」

私は巳也のいやに冷静な言葉が心に突き刺さつた。

「だつて。だつて・・・私、私は知らなかつたんだよ。

そんな、そんなに簡単に、生き物は死んで、死んでしまうなんて。

巳也は白くふわふわしたハツカネズミを私の手のひらから掬い取つた。

「けど、菜流は今、分かつたんだわ。

生き物はあつという間に死が訪れる」ことを。

「うん。

「じゃあいいんだ。

巳也はそう言つと、店員に事情を話し、お金を払つていた。死んで冷たくなつたハツカネズミは店員に渡されて行つた。

「お腹減つたね。」

巳也はそう言つて私の手を引いてまた歩きだした。

12時24分

ファーストフード店。

私達は注文を済ませた。

「今からどうするの？」

巳也はこつこつと笑つていた。

「そりやもちろん、服を買いに行くんだよ。」

「注文の品をお持ちしました。」

「ありがとう。」

巳也は目の前に置かれたてりやきバーガーを一口一杯に頬張りだした。
私もサラダを少しづつ口に運ぶ。

5口ぐらいで食べ終わつた巳也は笑いながら私を眺めていた。
「どんな服がいい？」

巳也はにっこり笑う。

私はその質問に服を想像してみた。

ゆっくりと頭の中を巡回するが、どこもかしこも、
白いままのスケッチブックが広がつていてだけだった。

「想像できません。巳也はどんな服が私には似合うと思います？」
私は食べ終わつたサラダの入れ物を片付けていた。

「じゃあ行つて見るか。」

巳也はにっこり笑つて歩きだした。

午後1時16分。

5階衣料品売り場。

いろいろな種類の服がひしめき合つよつに並べられていた。

「これはどうかな？」

巳也が引きずり出して来たのは、白いワンピースだつた。

「巳也がいいんだつたら、けど・・・

白だと汚れがめだつちゃいますね。」

にっこり顔の巳也はこう言った。

「大丈夫だよ。

汚れたらまた新しい物を買いにこよう。」

巳也が袖を通して見るようになつたので、

私はその白いワンピースを着てみた。

白いワンピースの裾に淡い水色の模様が入つていて、
それがどことなく夏の空を思わせていた。

「ありがとう。」

巳也にそう言つと頭を撫でられた。

午後1時39分

「今度はサンダルだな。」そう言つた巳也に連れられ靴屋に行く。オレンジの花が付いたサンダルを買つてもらつた。

「巳也。悪いです。

何でこんなにも私にしてくれるんですか？」

そう言つたら巳也はポカンと口を開けていた。

「何でつて・・・

お前の誕生日を祝いたいからに決まつてんじやん。」

巳也はにっこり笑う。

「けど、いくら誕生日だからって。」

「よし、次だ次。」

午後1時58分

3階、帽子売り場。

可愛いお花のモチーフが付いた、

サンダルとお揃いの帽子を買つてもらつた。

「菜流。可愛いなー。」

頭をぽんぽんと撫でられる。

午後3時26分

一通り買い物を済ませた

私達はショッピングセンターを後にしようとしていた。

午後3時26分42秒

人々が入り乱れていた

ショッピングセンターに突如として揺れが襲つ。

マグニチュード7・5の直下型地震だった。

この地震に驚き混乱状態に陥った人々は、
働きアリが道を失つたように、
出入口に雪崩れ込んだ。

巴也はその人混みに巻き込まれ消えていく。

「巴也ー！巴也ー。」

私は叫び人混みに割り込んだが、見つけられない。

「巴也ー！」

『ピキ。ガガ。』

変な音が辺りに響く。

入り口にいた人々は、
下に倒れた人を踏み台に

我先にと狂つたように

ショッピングセンターを後にする。

「巴ーーー也。」

不安と言つような感情は

無いけれど、そんな感情を私は感じていた。

『ガガ。ガリツ。』

また、音が辺りに響く。

この音は・・・

私は寒さを足元から感じ、巴也を探し続けた。

「巴也ー！巴也ー！」

「うつ。ううー菜ーーー流。」

私は風のよつた巴也の
声を耳を済まして辺りを

伺つた。

「菜流。」

入り口と反対方向から声が聞こえた。

「巳也ー・巳也ビ」ー・」

『ガリツ。コン。』

音が大きく響く。

「ニニ。」

人が折り重なった中から小さく聞こえた。

「巳也！」

私は息をしなくなつた

人々を搔き分けて巳也を

探した。

一人ずつ顔を見ながら巳也を探した。

小さな子供が口から血を出して白眼を向いていた。

お腹が膨れた女性は泡をふき、腹部から出血していた。

年を取った男性は首を90度ひねる形で息を引き取っていた。

「巳也・・・」

私の瞳に巳也の姿が写っていた。

「菜流か？」

私はそつと、巳也の頭を抱き抱える。

「そうだよ。」

「良かつた。けがしてないか？」

「うん、大丈夫だよ。」

そこから出れそう？」

巳也の体は息を引き取つて固くなつた人々に埋まつていた。

「菜流。俺はもうだめだ・・・

だから早くここから逃げてくれ。」

『ミシ。ガリガリ。』

大きな音が私に恐怖を教えた。

「いや。巳也を置いて行くなんて。」

私がそう叫んだ瞬間。

余震がきた。

『ゴゴゴゴゴ。』

ガラスの割れる音や壁が崩れる音が辺りから聞こえた。余震が治まつて私は巳也を見た。

「巳也！」

私の目の前に巳也の頭部が血に染められて転がっていた。初め、何が起きたのか分からなかつた。

しかし、巳也の頭部と胴体の間に大きな鉄板が突き刺さつていた。まるでギロチン台に乗せられた死刑囚のように。

私は彼が死んだと呟つことをふつふつと実感していたが、無意識の内に巳也の頭部を優しく抱き抱え、歩き出した。

巻き戻し、思い出した私は瞳に涙を浮かべ、落ちた涙が地面に吸い込まれていく。

「巳也。」

私は巳也の頭部にある短く切られた髪を撫でた。

「私はどうすれば。」

巳也の頭部から流れ出た血液が真っ白だったワンピースを赤く染めた。

「汚れちゃつた。

巳也は新しいの買つてくれるので約束してくれたのにね。もう、そんな約束果たせないね。」

『ドドドド。』

ヘリコプターの音が上空から耳にとどく。

私は真っ青な良く晴れた夏の空を見上げた。

【現在、南一紙ヶ区上空を飛行中。

「これは酷い。

建っていた建物がすべて全壊している。

死者多数と思われる。

あつ。生存者発見。

下降する。

何だろう。少女が手に持つているもの。

ボール?

!!男の頭部だ!】

この地震による死者約1億10万人。

行方不明者5000万人。

私は巳也に買つてもらつた赤く染まつたワンピースを大事に抱えた。後に聞いた話だが、

巳也は寿命が病気のために短く成つていたのだそうだ。

(後書き)

ぱっと、思い付いた話だ。けれど、やはり何らかの形で現代社会に影響を受けているとつくづく実感した。地震をテーマにしてみたが、何とも不格好な話になってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4862e/>

命と私。

2010年10月28日04時06分発行